ある夢である。

　ナンブ製のピストルから飛び出してくる弾丸が鈍く空中を進む。

　私達は笑する。我々の銃、資本の帝国への反撃の象徴、ＡＫ－４７の空気を切り裂く銃弾とはくらべものにはならない。ものが違うのだよ、ポリス・メン。

片道四車線の道路、奴らは白と黒に配色された車を並べて楯にし、我々の後方から仕掛けてきた。私は皆に指示し、トラック二台を止めさせ、卑怯なる敵を迎え撃った。

　奴らの蚊のような弾丸は我々に擦過しもしない。我々の銃弾は引き金を引けばポリスに命中する。私も狙いをつける。つけた刹那、もう警官の眉間に穴があく。しかしおかしい。ロジャーの銃弾も、ジョンのも、ブライアンのも、確実に敵を仕留めているのに、ポリスの数は減りもしない。むしろ徐々に増えている。

　もう相手にするのにも飽きた。このままトラックで離れても、警官はしつこく付いてくるだろう。

「ヘリを呼べ、ハインドを」

私は仲間に大声で言う。

ＯＫ！　返事はすぐ返る。３分で来るそうです。無線連絡したスパイクだ。

　ハインドにはナンブではかすり傷もつけられまい。ヘリが来るまで我々はゾンビ・ゲームをするようにポリスを撃つ。権力の手下はいつの時もゾンビである。

　程なくハインドは到着した。

　で、ＵＦＯのことだ。どこから来るのか？　最近は諸説ふんぷんである。宇宙の別の星というのはあり得ない。アインシュタインの物理学では光速よりはやいものは存在しない。異次元から来ると言われても、まず異次元の詳しい説明をしろよと言いたくなる。地底？　ありえんだろう。まともな学者の考察を知りたい。ユングなどオカルトで話にならない。やはり小松松太郎だな。まだ未読だが、その科学的考察は高評価だ。ぜひ読もう。小松松太郎著「空飛ぶ円盤の純粋理性批判」（日本理科学出版刊）を。

　スパイクの運転するHONDAの車の後部座席には私が座り、その隣には少女がいる。高校生ぐらいか。身なりはTシャツにショートパンツと至って普通である。だが、我々が装着させたものは違う。

　遠隔操作できるプラスチック爆弾を腹部に巻き付けている。それ以外の拘束具などは何も付けていない。する必要などない。少女は力なく座っているのだから。

　冷や汗を流し、くぐもるように泣いている。

　私は起爆スイッチを右手に持っている。セーフティーを外し、ボタンを押せば、少女は死ぬ。

　少女よ、どんな気分だ。

　絶望しているだろう。もう君には君の人生の終わりを味わうことしか出来ない。郊外のアウトレットモールの人混みの中で爆死してもらう。外を見ても和めないだろう。空き地があったり、倉庫があったり、人々が働く無駄な箱が建ててあったり、つまらないだろう。

　冷房の効いた車内で、汗と涙を流しているのが死の儀式の直前にはふさわしい。

　君は四方を壁に囲まれているだろう。どうしても越えられない壁に。すべての人間が最後に直面するものだ。壁を叩いては、壁をよじ登ろうとしては、そのたび、人の運命を感じるんだ。

　さあ、その状況でどう生きる？

　君はどう生きてきたのかな。

　君は自由で無意味な存在として生きてきたのか。だとすればそのままだな。

　君は、生産力で規定されず、

　君は、無意識には決定されず、

　君は、社会の習慣にも決められず、

　君は、「夢は他者の語らいだ」などという言説にも分解されない、

　そんな存在だったんだよ。

　君は君を形づけようとするものに抗い、君の手で君を造ろうとしたかい。

　泣くだけしかできないか……。

「その子を逃がしておやりよ、純一」

　不意に助手席から、１６年まえにもがき苦しみ病死した母が言う。

　母さん、あんたは壁を越えたのか？

　私が問いかけた時には、もう母はいなかった。

「止めろ」私はスパイクに言った。

　何だよ急に。言ってスパイクは車を止めた。

　私はドアを開け、少女を外に引きずり出した。

　少女はしどけなくへたり込み、声を上げて泣く。

「さあ、逃げていいぞ」

　言った私の顔を少女は見る。

　少女はへたり込んだままだ。

「逃げないとここで撃ち殺すぞ」

　私はホルダーから銃をぬき、少女を狙う。少女はよろめきながらも立ち上がり、私に背をむけ、力なく、空き地の方へ走り出した。空き地の向こうの白い建物周辺に数人の人がいる。

　私は待った。少女が離れるのを。充分な距離が出来た時、私はセーフティーを外し、起爆のボタンを押した。

　轟音とともに、少女は、花が一気に散るかのように、八方に砕けとんだ。

　私は幾ばくか少女の存在した方へ歩み、肉片をひとつ、取り上げた。

　それを戦闘服の胸ポケットに入れた。

　肉片の血が、服に染み込み、やがて胸に冷たく染みた。